

令和元年度 終了評価書

- 研究機関 : 日本電気、日本電信電話、東京大学、早稲田大学
- 研究開発課題 : IoT 共通基盤技術の確立・実証(課題 I 高効率かつセキュアな IoT データ収集・配信ネットワーク制御技術の確立)
- 研究開発期間 : 平成 28 年度～ 30 年度
- 代表研究責任者 : 津村 聡一

■ 総合評価(5～1の5段階評価) : 評価3

■ 総合評価点 : 19点

(総論)

当初目標を着実に達成した。

エッジ、クラウド間の分担等は一般的に納得できる内容であるが、類似技術と差別化を図り、より革新的な取り組みがあるとさらによい。

ITU-T における標準化に向け道筋をつけることができたのは評価できるが、コンテンツ指向ネットワークに関して引き続き市場性をより深く検討していただきたい。

(コメント)

- 当初目標を達成するとともに ITU-T での標準化に向け道筋をつけることができた。
- 基盤となる仕組みができた。標準化活動につながっているのは良い。
- どの課題も標準的に成果が出ている。エッジ、クラウドとの分担等は一般的に納得できる内容であるが、より革新的な取り組みがあるとさらによかった。
- 要件の落とし込みと類似技術との差別化が若干弱いように感じるものの、当初計画は着実に実施している。
- 特に、コンテンツ指向ネットワークに関しては、引き続き市場性をより深く検討していただきたい。

(1) 研究開発の目的・政策的位置付けおよび目標

(5～1の5段階評価) : 評価3

(総論)

5Gの商用サービスが各国で開始されることを踏まえたデジタル変革時代に必須となるテーマであり、適切である。

(コメント)

- 5Gの商用サービスが各国で開始されることをふまえ適切なタイミングである。
- 妥当である。
- デジタル変革時代に必須となるテーマであり、適切である。

(2) 研究開発マネジメント(費用対効果分析を含む)

(5～1の5段階評価) : 評価3

(総論)

実施機関の間での分担が明確でよいが、実用化・事業化に向けてはまだまだハードルがある。ビジネスプロデューサーを中心に顧客価値の視点から深く検討を加え、実用化・事業化に向けての道筋を明確にできると良かった。

(コメント)

- 実施機関の間での分担がきちんとできている。
- 組織間での分担が明確で良い。
- 実用化・事業化に向けてはまだまだハードルがある。ビジネスプロデューサーを中心に顧客価値の視点から深く検討を加え、実用化・事業化に向けての道筋を明確にできると良かった。

(3) 研究開発目標(アウトプット目標)の達成状況

(5～1の5段階評価) : 評価3

(総論)

エッジ処理によりデータ転送量を 1/10 におさえるという目標を達成し、妥当な成果が得られている。

(コメント)

- エッジ処理によりデータ転送量を 1/10 におさえるという目標をクリアできている。
- 目標を達成する成果が得られている。

(4) 政策目標(アウトカム目標)の達成に向けた取組みの実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価4

(総論)

標準化活動の成果として、ITU-T SG13 において、今回開発した技術の一部を要求事項として勧告化することができたことは評価できる。また、IoT 分野は、ユースケースが第一であることから、ユースケースを起点として研究開発を進めてきたことは評価できる。

(コメント)

- ITU-T SG13 において、今回開発した技術の一部を要求事項として勧告化することができた。
- 標準化活動は評価できる。
- IoT 分野は、ユースケースが第一である。そうでないと机上の空論になってしまうためである。このような観点から、ユースケースを起点として研究開発を進めてきたことは評価できる。

(5) 政策目標(アウトカム目標)の達成に向けた計画

(5～1の5段階評価) : 評価3

(総論)

妥当な計画であるが、標準化については、標準化のための標準化にならないよう、何のために標準化をするのかについて深い検討を行いながら進めていただきたい。

(コメント)

- 妥当である。
- 標準化については、標準化のための標準化にならないよう、何のために標準化をするのかについて深い検討を行いながら進めていただきたい。